

THE CALL OF WHISKEY

GEORGE COCKLE



ザ
コール
オブ
ウイスキー
ジョージ
カックル

ウイスキーは旅と同じで、呼ばれるものだと思う。自然に呼ばれるからこそ、付き合えるのかもしれない。

僕は二十歳を過ぎて酒を飲めるようになって、大抵の人と同じように、バーでウイスキーを頼むのはハードルが高かった。最初はビール以外、何を頼めばいいかわからずにいた。ある日、隣に座っている人が頼んだジンライムを真似して飲んでみると、小学生の頃につけていたバイタリスというヘアトニックを思い出した。海に入っても形が崩れないという理由から、子供なのにバイタリスを愛用し、シャワーを浴びるとそれが顔を伝って口の中に入っていた思い出がある。そんな記憶をジンライムが蘇らせてくれた。

やがて時が経ち、僕はウイスキーに感謝するいくつかのキーポイントに巡り合った。

最初の記憶はシンガルの浅川マキのライブによく行っていた時代だ。中央線沿いの店で開催されたライブを観に行った時のこと。そこは怪しい雰囲気の一軒家だった。店の中は暗く、客のほとんどは男性。もう何十年前のことだから、き

と思い出が勝手な道を走っていると思うが、記憶の中では皆んな黒いサングラスをかけ、ベレー帽をかぶっていた。そして彼らの小さなテーブルには氷の入ったウイスキーのグラス。僕は見とれていた。まるで五〇年代のビートニックの世界に迷い込んだ感じだった。浅川マキがステージに立つと、瞬間的にスポットライトが当たったが、彼女は自分からライトを外してくれと言っていた。不思議な世界だった。暗闇で飲むウイスキー、暗闇で歌う浅川マキ。実はまだこの時も、僕にはウイスキーはハードルが高くて飲めず、以降、何年もの間、羨ましい気持ちだけが心に残っていた。

ウイスキーにまつわる話は、ロンドンにもある。ジャズシンガー阿川泰子さんの一九九六年のアルバム「Echoes」のレコーディングでロンドンを訪れた時のことだ。彼女はシェラトンに泊まっていた。仕事が終わわり、二人でロビーの横にあったバーに足を運ぶと、カウンターの向こうには様々なウイスキーが並んでいた。バーテンダーはもちろん蝶ネクタイ姿。その上品な雰囲気は圧倒されながらも、まずはリコメンドを聞いてみた。この時初めて僕は、何年も寝かせたウイスキーをロックで飲んだ。驚くほどまろやかで、喉をスルスルと通り抜けていく。品があり、これこそ僕が求めていたウイスキーだと感じたほどだ。そして店でウイスキーを飲むときは、バーテンダーの質が飲み手の想いを左右するのだと思っ

た。このとき、僕はやつとウイスキーに呼ばれたのだ。

その後、カリフォルニアへ渡った僕は、サンフランシスコで築百年の家を購入した。アメリカ人がよくやるように、その家を友達と一緒にリフォームしていった。中でも一階のキッチンのカウンター作りは力が入った。夜ひとりでカウンターに座り、浅川マキを聞きたかったのだ。以前、日本で見たライブのように、ウイスキーをかつよく飲むのが理想だ。そのために特別な黒い石を貼ったカウンターを作り、天井には十二ボルトのケープライトを設置した。上から二本の細いワイヤーを下げ、そこに小さいスポットライトをかけて、光がカウンターの真ん中にあたるように取り付けた。椅子はちょっと高さのあるバー・スツール。そこに座ってロックグラスにウイスキーを注ぎ、一九七〇年に発売された浅川マキのデビューアルバム「浅川マキの世界」をかける。一曲目の「夜が明けたら」から、最後までじっくり聞く。CDではなく、レコードでね。アナログの音はまるやかで、ウイスキーにじっくりくる。暗闇の中、スポットの光でレコードを聴くのは特別な時間だ。ちょうど一杯飲むぐらいのタイミングで、レコードを裏返す時間になる。これはアナログのいいところだ。わざわざ立ってプレイヤーのところへ行き、ゆっくりレコードを返し、針を乗せる。最初のパチパチした音を聞くのもロマンチックで、そんな雰囲気もまたウイスキーによく似合う。特別な時

間となるのだ。

僕は今、家族とともに、鎌倉に暮らしている。家のすぐ横には江ノ電が走る。僕はまたそんな家の一角に、江ノ電を見下ろすようなカウンターを作った。上からはいくつかのプラントを吊るし、昼間はその成長を眺め、夜になると、そこに座って電車を眺めながら一杯飲む。江ノ電は二両か四両ということもあり、ゴトンゴトンという音をさせながら、あつという間に目の前を過ぎていく。片手にウイスキーのグラスを持ちながら、家族が寝静まった夜にひと息つくのが僕の楽しみだ。実は先月、ただのサボテンだと思っていたひと鉢に、大輪の白い花が咲いた。調べてみると、ほんのひと晩だけ姿を見せるといふ月下美人という花だった。宵闇に堂々と咲く、透き通るような白い花。僕は儚い命に、釘付けになった。その夜のウイスキーはいつにも増して美味しかったのは、言うまでもない。

ジョージカックル ラジオ・パーソナリティ。一九五六年鎌倉生まれ。幼少時代を日本、テキサス、韓国で過ごす。インドをはじめ世界各国を放浪し、十八年に及ぶサンフランシスコ生活を経て拠点を日本に移す。アメリカ、日本で多種多様な職業を経験したのち、音楽プロデューサー、コラムニスト、作詞家、サrfアーとして多忙な日々を送る。現在はインタrfMや湘南rfMで自身の音楽番組を持つ。著書に『ジョージカックルのWELL WELL WELL スローでメロウな人生論』、『ジョージカックルの鎌倉ガイド』など多数、雑誌『ザ・サrfファーズ・ジャーナル日本版』のマネージング・ディレクターを務める。